

英学再事始—新たなる時代へ向けて—

(その2) 「LL」と「英文学」について⁽¹⁾

—「『英文学』と『英会話』論」亡国論—

上 田 見 二

Nothing comes out of nothing. (Shakespeare)

はじめに；歩けなければ走れない。

人間はよく「感情の動物」と言われるが、「哲学の動物」でもある。各人の価値観に、その生きる社会の価値観に、またその時代の価値観に左右されながら生きている動物である。そして、この「哲学」は言語による表現・認識と深く関係を持っている。「ことば」は全てではないが、それに近いと言える場合も少なくない。このシリーズ「英学再事始」の(その1)で、著者は「読む」という日本語の「ことば」が、日本人一般の「読む」(ここでは、外国語としての英語についてであるが)ということ、ひいては「英語」というものに対する考え方、いわば「英語哲学」にどのように関係しているかについて考察を試みた。本質的に全く異なる行為が同じ「読む」という日本語で表現されるが故に、日本語で、「哲学する」日本人は、英語というものに対して、認識を誤ることになる。さらに、誤れる認識に基いた「価値観」がいかにかに英語を学習する日本人の進歩を妨げてきたか、また妨げているかを指摘した。

英文学が読めるためには、英語が読めなければならないのは当然である。従って、英語を「読む」ことをめざす。ところが、英語を読めるようにはなかなか読めない。一体なにが妨げているのか？西をめざす船がいつまでたっても西にあるべき目的地に着かない場合、なんらかの物理的原因で羅針盤が狂っている可能性がある。方向が違っていれば、いくら進んでも到着しないのは、これまた当然である。いくら勉強しても本当に読めるようにならない場合、その勉強の『方向』が違っていている可能性が大いにある。そして、実際に方向が正しくなかったのは、指摘した通りである。英語学習の『羅針盤』を狂わせていたのは、実は狂った価値観であった。この狂った「磁場」の下では、羅針盤は狂った方向しか指さない。しかしながら、狂った磁場の下ではどの羅針盤も同じように狂うが故に、その『狂った磁場』に気がつくことは、相当に難しい。

本当に「読む」ことができるためには、「読む」ことをめざすと同時に、「読む」ということはそもそもどういふことなのかについて、正確な認識が必要である。この認識が正確性を失う時、英語学習の羅針盤は『狂った磁場』の下に存在し始める。そして、次第に『西』ではなく、少しずれた方向（たとえば、西北西とか西南西とか）を指すようになる。なぜなら、西北西や西南西も西のうちという『狂った磁場』が存在するからである。

この『狂った磁場』からの脱出は、指摘の様に『初原的認識への回帰』によってのみ可能である。即ち、読めるといふことは、話せるといふ前提の上にはじめて可能なのであって、この前提が不十分な限りは、「読む」ことも不十分であるといふことである。

話したり聞いたり（この両者は本来一体の性質を有するが）出来ない人は、読んだり書いたり出来ないという真理は、「歩けない人は走れない」と言うに等しく、極めて『初原的認識』であるはずである。『歩けない人は走れない』以上、話したり聞いたり出来ないが読んだり書いたり出来ると主張する人々は、歩けないけど自転車には乗れるような『似而非なるもの』である。

所詮、歩けなければ走れない。前稿は、このバカバカしいほど当り前の認識に結論したが、本稿では、「それでは、いかにすれば『歩ける』ようになるのか」といふ問題に進む。

1. もうひとつの『狂った磁場』；「会話」

最近出版された元駐日大使ライシャワー博士の日本論、*The Japanese*（日本人）⁽²⁾は、そのうちの一章をわざわざ“Language”に当て、その中で日本の英語教育について痛烈な批判をしている。極めて教えられるところ大であると思うので、以下各所引用させていただき、その参考になるポイントのいくつかを述べてみる。

まず、日本の英語教育について、現状を次のように表現している。（P.381）

While almost all Japanese have studied English in school, few can even read English with sufficient speed and accuracy to make English reading more than a painful process of decipherment.

まさに言いえて妙であるが、ここで嬉しくなったのは、ライシャワー博士が、

“decipherment”という言葉を用いている点である。これは、筆者が前稿で繰りかえし用いたD (=decipher)と同じであるからである。日本人を知りつくし、日本人の英語に対して駐日大使時代から適切なコメントをされてきた博士だけに、筆者のいう「似而非」なるものが同じterm で表現されているのを見て、思わず嬉しくなった。決して大きなterm ではなかったのだ、と思い、Rに対するDという考え方に自信が与えられた。読み進むうちに、このDがここだけでなく繰り返し使われているのに驚かされた。(pp. 397~398)

… It seemed adequate to import foreign knowledge through writings which could be deciphered and translated at leisure and to train a few experts for this purpose and for necessary dealings with foreigners. There even seemed an advantage in not communicating much with foreigners and in keeping them learning much about Japan and what was in the minds of Japanese. In this way, Japan would have the advantage of operating out of sight of the foreigners, while they would be fully revealed to Japanese. Thus, the Japanese have a long tradition of learning to decipher a foreign language but not of speaking or communicating with foreigners. (下線は筆者)

明治以降日本人が伝統的に学んできたのは、外国語の“decipher”の方法であって、外国人との“speaking”や“communicating”ではなかったし、外国の知識を書物を通じて取り入れるために、外国語を“decipher”し“translate at leisure”してきたと言うのである。決してR (=read) してきた訳ではなかったと喝破していて、筆者としては意を強くした次第である。

もう一つ興味深く思ったのは、日本人が英語について論じる際に必ずと言ってよいほどよく使われるterm である「会話」、即ち“conversation”と言うことは、ほとんど用いられていないという事実である。そのかわりに、前に引用したように、“speak”等の表現が多いのである。このことは、なんでもないようで、実は大変に重要な意味を持っているのである。

「読む」を考える際にRとDの区別が重要であったのと同じように、「話す」を考えていくうえで、それが日本語で実際どのように表現されているかを考えることは非常に重要であるからなのである。

我々が中学校から高校へ進んだ時、それまでは「英語」の教科書だけだったの

が、「英文解釈」、「英作文」、「英文法」、それに「英会話」のためのそれぞれの教科書が渡されたことを印象深く憶えている。「英文解釈」の方はリーダーと呼ばれることが普通だったが、英語の勉強のカテゴリーとしては、それはあくまで、「英文解釈」であった。それぞれに、「英作文の先生」や「英文法の先生」が存在した。それからは「英語」という学科は以上4個のカテゴリーに分類して認識されるようになった。換言すれば、高校生だった筆者の「英語哲学」の根底にこの認識が根を張ってしまった。

英語とは単語を記憶し、文法の知識をより多くより正確にすることであり、この単語と文法の知識を活用して、「英文解釈」し、またその逆に「英作文」することであった。これが英語の勉強という仕事の主流であって、なぜか「英会話」というものは、言ってみれば「はみだしもの」もしくは「よけいなもの」という印象が強かった。試験にも出ることは少ないし、インセンティブがなかったのである。英語という世界は、英語の文章を日本語へ日本語を英語へ置き換える世界と、「会話」という全く異質の世界という具合に二つの世界に分けられた。当然のように、前者が「母国」になり、毎日そこに住み続けた。後者は、あたかも行く必要のない「外国」であった。

しかしながら、その「外国」は、行く必要がなく、また受験勉強に忙しい身にとっては、行くべからざる「外国」であったと言える。にもかかわらず、一方で魅力的であり相当に誘惑的でもあった。

高校生であった筆者は、ついにその誘惑的魅力に負け、放課後毎日その「外国」へ通うようになる。即ち、NHKのラジオ英会話を聴くようになるわけである。松本亨先生とアメリカ人の女性がアシスタントであった。この松本先生との出会いで初めてひとつの「開眼」を体験するのである。即ち、二つの世界などあるはずがない、いやあってはならないのだ——という認識である。話せることは、紙に書けば英語の文になり、聞いて理解できることは、活字で見ればずっと楽に解る。逆に、立派な表現や文章を口に出して何度も読むうちに自然と憶え、そういう機会はなかったが、もし外人に会ってその憶えた表現を使えば、正しいのに決っているから、その外人に通じるはずであり、さらには、それらの英語は作家等の文章のプロが書いたものであるから、もしかしたらその外人は驚くかも知れない。——そういう認識が、別に松本先生が番組で説教された訳ではないが、先生の英語への大変な情熱が伝わってくるにつれて自然と生れてきたのであった。もはや「英語」は「英語」以外の何物でもなくなった。これは、若い筆者にとって

は、やはり「開眼」であったと言いたい。

少し長すぎたが、筆者の言いたかったのは、この「開眼」がそれから英語の道へ進むことになる筆者にとって、いかに『狂った磁場』を防いでくれ、まっすぐ正しい方向へと導いてくれたかということである。大学へ入学した後、いかに多くのクラスメートが(かなりの成績をあげてきたが故に)高校時代に根を張ってしまった誤れる英語観によって「磁場」を荒され続け、結局は“decipher and translate at leisure” 以外は満足な language skills を持たずに終わったことか。彼等は話したり聞いたりする学習を「会話」と呼び、「会話」ということばには常にライシャワー博士の言う“pejorative” な響きが付きまとった。『英会話は本当の英語ではない』というような人までいた。英会話は、彼等には依然として別のカテゴリーのものであった。従って、そのDのskill に比べて、信じられないぐらい「話す」ことが出来なかったし、外人教師の授業はなかば「ツンボ」同然であった。しかしながら、彼等の多くは大して気にはしていないようだった。なぜなら、「英会話」は下手でも、ちゃんと英語の本は読めると信じていたからである。言い換えれば、「英会話」は出来なくても、「英語」は出来たのである。彼等の英語観からすれば。

問題であるのは、彼等のみならず普通の日本人はたいい「英会話」という不思議な「ことば」の作り出す『狂った磁場』の下にあり、結果として英語観という「羅針盤」は、不正確な方向を指し続けているという事実である。

本来、「会話」ということばは、日本語に於てはそれほど頻繁には使われない。少なくとも、外国語について話すとき以外は。(日本語に関して)彼は会話が上手だ下手だと言え、それは決して日本語が(即ち、母国語が)完成しているとかいないとかを問題にしてはいない。それは言語学的能力よりも社交的な能力を問題にしている。言語よりもその人の性格的な側面が問題にされているのである。従って、「あの作家は見かけによらず会話が下手でねエ」というような日本語だって可能である。

ところが、外国語についてこの同じ「会話」ということばが使われると、全く異なった意味を持ってくる。もし、英語に関して、「あの作家は見かけによらず会話が下手でねエ」と言え、その作家は英語という言語をコミュニケーションの道具として使うことが十分に出来ない、即ち「話す」ことが十分に出来ないという意味であるのが普通である。まとめて言えば、「会話」即ち「話す」ことである。そして、こういう場合には、「英会話」が下手だと言うことが多い。「英」

という字が「会話」にくっついていろいろな場合に使われる。例えば、英会話学校とか英会話番組という風に。この意味で、英語学校とか英語番組と表現することは、めったにないと言える。なぜなら、あくまで「英語」ではなく「英会話」だからである。両者は別物でなければならないからである。「英会話」とは、英語を話すことであり、「英語」は「話す」ことには重点を置かないイメージが強いとも言える。

ではここで、外国人が異国の言語を学習する場合のことを考えてみよう。例えば、アメリカ人が日本語を勉強する場合（このケースは筆者自身よく知っているが）にはどうであろうか？ほとんどのアメリカ人は、先ず日本語を正しく発音できるように努力し、次に日常的な語句が話せるように、聞いて理解できるように努める。話せもしないうちから活字の世界へ入るような人は少ないだろう。ましてや、片言の段階で文学作品に挑戦するような人はいないと言える。彼等は話し・聞く学習を大切にする。しかしながら、「日本語会話」を勉強しているとは普通言わない。日本語を始めたと言えば、日本語を「話す」ことが出来るようにすべく勉強することに決っており、これは「日本語」の勉強以外の何ものでもない。そして、学習が進み日本語が読めるようになっても「和文英訳」をやっている訳でもない。その進んだ段階での「日本語」の勉強である。

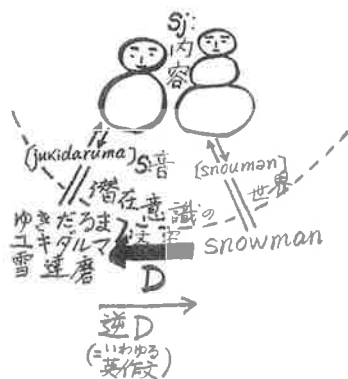
もうこれ以上は必要ないであろう。会話＝話す。この意味で「英会話」という term が使われる限りは、スッキリした英語観は期待しにくい。丁度、Dのことも「読む」と表現してきたことが、真に「読む」ことの出来る段階に到ることを防げてきたように、「話す」ことを「英会話」と呼び「英語」と対立するようなイメージで把えることは、真に「話す」ようになれる可能性を減じるものであると言わざるを得ない。

「哲学的動物」である人間にとって、その哲学が「ことば」に大きく左右される可能性がある以上、「ことば」は怖い存在である。

2. LLではダメ、LLLでなければ！

二つの『狂った磁場』から脱出して、いよいよ問題の核心に迫ろう。「話す」とは一体何か？また、その逆方向の「聞く」とは？

そもそも言語とは何かという問題から始めるのが最も良いであろう。次図(Fig. 1)を参照してもらいたい。専門家によって呼び方がいろいろあるようだが、内



[Fig. 1]

なわれる。SjとSは大体において一体である場合が多い。Sj即Sであり、S即Sjであって切り離すことが出来ないほどである。

外国語の場合はどうか？これが問題である。母国語のようにスムーズには行かない。Sを聞いてもSjになかなか結びつかない場合も生じてくる。表現したい時も、なかなか正しい意味をとまなうSが出てこない場合も少なくない。従って、S⇌Sjのプロセス自体が問題の中心になってくる。「読む」・「書く」は本質的にLとSの間の問題であるからして、このS⇌Sjプロセスの問題は結局は「読み書き」の問題、それも外国語を「英文和訳」や「和文英訳」と呼ばれている、いわば「受験英語」的（もしくは、この方法が伝統的に用いられてきたという意味では「伝統的」）な方法で「読み書き」するのではなく、外国のことばであっても、できるだけ母国語のように「自分のことば」として「読み書き」する際の最重要問題となる。

上智大学教授の渡部昇一氏は『⁽³⁾秘術としての文法』の中で、『いわゆる受験英文法をマスターしそこなった人間の知性は信用しがたい⁽⁴⁾』という意味のことを彼の大学の言語学の時間に言ったら拍手が起ったと述べているが、確かに「文法」は氏の言うごとく『魔法』であり、このお陰で『つい一・二年前まではチンプンカンプンであった横文字の本が、文法に従って文脈を追って行くと明晰な意味を現出してくる』⁽⁵⁾のである。そして、『十五、六才の学生に、文法書と辞書を与え

容をSj、音をS、文字をLと簡略化して呼ぶことにする。母国語の場合（右側が英語、左側が日本語の場合を示す）には、表現したいSjが頭に浮かぶと即Sになって表現される。必要があればLにすればよい。この過程が「話す」＝「書く」プロセスである。逆に、Sが聞こえてくれば、即そのSjを理解できる。Lで情報がインプットされれば、それは即Sへ、そしてSからSjへと伝わる。これが「聞く」＝「読む」である。母国語の場合には、この両方向の動きは一瞬にして行

て適当な指導を与えれば、二三年後には英米の読書階級が読むような本でも読むようにすることができる』⁽⁶⁾し、『ゆっくり読んでもよいという条件のもとでなら、同じ年齢のアメリカ人の青年とくらべて、ペーコンをより不正確に読んだということにはなかつたと断言⁽⁷⁾(下線は筆者)』できるような英学生も出てくるのである。しかしながら、これはすべて「魔法」でもある「文法」による(私の言う)Dの行為であって、前稿でも説明したように、それはそれとして立派なことではあるが、このメリットに「おぼれる」と、英文科の学生としてクラスで最も成績がよかつたかつての渡部氏のように、『原書の小説を読むのに最も臆病で』あり、『大学院生としてもそうであった』⁽⁸⁾ということになりかねない。二十代の中ごろに三年ばかり留学したときは、英語とドイツ語で学問したり発表をしたりできるようになって帰ってきた』教授のような優秀な学者でも、『はた目には』教授が『自分の英語について鋭い不全感を持ち続けているようには思われなかつた』にもかかわらず、彼としては、『常に落ち着かない気持』を持ち続け『私の英語は本物ではない』という不全感に悩まされることになる。いつまでたっても、彼が少年時代に読んだ『三国志』や少年講談や捕物帳のように、『ぞくぞくする気持で』英語の本を読み進むことは出来なかつたし、大学三年の時に読んだ漱石などから受けた深い感動を英語の小説で体験することはなかつたと渡部氏は告白している。

『一生を外国語にかけた男として』彼がこの不全感を克服するのは、三十代も終りになるころアメリカに『留学のし直し』をしたのちのことであつたらしい。相当にもがいた末にあるベスト・セラー小説が契機となって、母語の時と同じように『ほんとうにおもしろく』小説が読めるようになり、この時点で初めて『英語不全感』が消え去ったそうである。このことについて、氏は『少くとも読書に関しては「自己に忠実」であつたことの報酬として与えられたものと解釈』し、『少年のころの「おもしろさ」をどこまでも忘れずに、そこに至らないおもしろさは本物でないとしてきた、そのほうび』⁽⁹⁾だと言っている。全くその通りであろう。しかしながら、言語学者であることを強調する教授に、筆者としては、『そこに至る』とは何かを、言語学的に分析し、よく理解できるように、その活発な知的活動(数多い書物の出版や対談等)の中で、説明してもらいたいものである。

『そこに至る』とは、結局はここで問題にしているS⇌Sjのプロセスが英語であつても母語の日本語と同じように(もしくは、非常に近い状態で)スムーズになつた、即ち、それに要するスピードが「即」の域に至つたと言ふことである。

渡部教授に再び登場してもらふと、『大学の授業を理解する能力と旧式の英文

和訳ができる能力は、ひじょうに相関度が高いのです』¹¹⁾と、The English Journal 誌1979年1月号の対談『もっと効果的学習法をさぐってみる』の中で主張している。全く同感であり、大切なポイントを指摘していると思う。しかし、その先がよろしくない。対談の相手である『日本人—ユニークさの源泉—』¹¹⁾の著者グレゴリー・クラーク教授の『その相関関係はなぜ高いのでしょうか』¹²⁾という質問に対して、『とにかく、ひじょうに高いのです。』とだけ答えて、何ら言語学的説明をしていない。それどころか、この「英文和訳」を、筆者が「もう一つの『狂った磁場』』として批判した「会話」と対立する形で扱っている。渡部教授は続けて言う。『……会話はうまいけど英文和訳があまりできない子、会話もうまいし英文和訳もできる子とふたつあるわけです。』と、他のところでも、例えば、平泉渉参議院議員との有名な英語教育論争¹³⁾に於ても、この対立概念的認識が強調されていると言ってもよいであろう。残念なことと言わざるを得ない。なぜなら、『そこに至った』即ちS ⇄ Sj の母語接近が完成した先輩が、どうして本論文で強調している「狂った『磁場』」をまきちらすような表現を使うのであろうか。どうして、「会話」だ「英文和訳」だと、バラバラの勉強をしていたのでは、いつまでたっても『そこに至』らないと言わないのだろうか。「会話」だ「英文和訳」だとバラバラに英語を分けて考える考え方自体がおかしいし、従って、そのような「おかしな考え方」に至らないためにも、(筆者が何度も強調しているように)「会話」だ「英文和訳」だといったterm は使わない方がよいと、どうして言ってくれないのだろうか。

次に、「Sj」自体の理解、即ち「ことば」(SであれLであれ)の意味がやさしいか否かの問題について考えてみたい。その理由は、ここで問題にしている、S ⇄ Sj の問題にとっては、本来「別問題」であって、混同は決してしてはならないからである。頭の整理のためにも、国弘正雄先生のよく使われる「コトバ・コト・ココロ」という論法を使わせてもらえば、S ⇄ Sj という問題はコトバの問題であって、書いている内容の理解とは、コトの理解であり、さらにはコトのココロの問題であると言える。渡部教授の言われるように、『だいたい評論や人生論は、日本語のものだって早く読めるものでもない』と思う。早く読んだら意味がない場合もある。しかしながら、だからと言って『むずかしい評論なら、辞書を片手に文法的に文脈を追いながらゆっくり読んだ方が、翻訳でさらさら読むよりも、かえって頭に入るくらいのものである。』¹⁴⁾と言ってしまえば、翻訳との比較

の部分は別問題として、『むずかしい』意味について、 $S \rightleftharpoons S_j$ のむずかしさと S_j 自体のむずかしさの混同がなされると言えないだろうか。(さらに、『ゆっくり読んだ方が』と言っているが、この場合、内容のむずかしさとは別に $S \rightleftharpoons S_j$ のむずかしさ故に、『ゆっくり』しか読めないとも言えるが、どうであろうか。)注意したいのは、古典の場合は英語自体が古いこともあって別であるが、現代英語で書かれたものの場合、 S_j のむずかしさ故に $S \rightleftharpoons S_j$ のスピードの遅いことを見のがしてはならないという点である。別なものは別にして考えないと当面の問題の考察がおろそかになる。

さて、 $S \rightleftharpoons S_j$ の問題にもどるが、日本の英語教育を受けてきた者として、また日本の大学で(それも、私立国立と複数の大学で)英語を教えている者として言えることは、受験文法をマスターした学生ならDの方法でなかなり内容のむずかしい英文でもこなせるが、その一方で、Dに頼らず $S \rightleftharpoons S_j$ のプロセスで英語を処理することは、恐らくできない、とすることである。「英文和訳」で英語を文字で見、それを日本語にDして、あとは日本語の言語回路にいわば「委託」して処理していると表現できる。もっばらこればかりやってきたのだから、この「技」に関しては、相当に出来るか完成に近い学生もいる。後者の $S \rightleftharpoons S_j$ に関しては、学校教育でほとんどやっていない以上、できないのが当然である。問題はこの先にある。それでは、大学入学後にこの $S \rightleftharpoons S_j$ の強化をやっているかと言えば、これは大きく一般英語と専門英語に分けて考えると、どちらに於ても悲観的にならざるを得ない。

宮崎大学の高須金作先生は、1977年3月に出た『徳島大学における外国語教育改善のためのプロジェクト報告書』に対して、筆者としては大変に共鳴できる批判⁽¹³⁾をされているが、氏の言われるように『一般教育の授業課目に外国文化、思想についてのものを設けると同時に語学教育は外国語を習得するものとして、人生や教養の色あいを至極うすいものにする』ことにしても、現在のように週2コマでは、 $S \rightleftharpoons S_j$ の学習は大変に困難であると言わざるを得ない。まず第一に総時間数が不足。第二に、Dの訓練と違って、極めて集中的に行なわないと効果のない性質のものだからである。フロを沸かすのに、例えば一日に水の温度を2度や3度上昇させてストップするようなことを、何日続けても、フロは永久に沸かないだろう。しかし、一日に1ccずつインクを入れれば、一年も続けるうちにフロの水はインクの色になるだろう。前者が $S \rightleftharpoons S_j$ 、後者がDである。

それでは、英文学科等の専門に於てはどうであろうか。英文科の卒業生なら誰

でも知っているように、もっぱらS ⇄ Sj を訓練する科目は非常に少ない。英文学の英文を読む、それもDしながら読む時間が圧倒的に多い。受験英語しかやっていない学生がほとんどだから、入学後はDしか方法がないであろう。しかし、段々にDに頼らなくてもよいように、英語の母語接近化を行なうべきで、そうすれば、卒論を書くころまでには遅くとも、「スイスイ」読めるようになるはずである。ところが実際は、カリキュラムの中を見ても、残念ながら「会話」のみがS ⇄ Sj を目指した学科である。それも週に1コマか2コマである。他にも、LLを使える学科はLL化されているケースも少なくない。筆者の大学(学部)時代は、この「会話」がすなわちLLであったように記憶している。文部省のカリキュラムを大学の当時の事情に当てはめてそうなったと思うが、LLの中で行なわれた「会話」で、生きた人間と文字通り会話したことはなかった。LLの演習の内容自体はすばらしくて、終わったあと何か頭の中に「英語だけで英語が処理できる機械」が小さいながらも確実に出来たような気持ちになって嬉しくなったものだが、それも大変残念なことに、週2回ぐらいしかなかった。それも2年生からで、教養部時代の1年次にはなかった。筆者の知る限り、現在でも日本国の英文科等英語専門課程は、大なり小なり筆者の大学時代と同じである。

LLだLLだと騒いだ時代はすでに去り、今やLLは反省の材料になっている感があるが、ハードであるLLをいくら反省しても意味がないのであって、ハードを使うソフトこそが問題であろう。

ソフトとは何であるか。電子工学のすばらしい発達によって教育も含めて情報処理に関する機器は驚くべき進歩をみせているが、これらハードをいかに使いこなすかという、いわば人間の知恵の方はそれほど進歩していない。ハードを創り出した同じ人間の頭がそれをどのように使うかで困っていると言える。LLの場合、LLという機器でどういう教材をどのように使うかというのがソフトであるが、この分野に関する研究は活発である。LLのための学会まである。にもかかわらず、学生のS ⇄ Sj 能力は昔にくらべて大差がない。どうしてであるか？

答は至極簡単である。前述のフロの喩えを再び持ち出すまでもなく、週あたりのコマ数が絶対的に少なすぎるのである。いくら頑張っても大きな効果は望めないようになっていとも言える。いくらすばらしいソフトもこういう「仕組み」の中では効果を出しにくい。問題の中の問題は「ソフトをいかに使うかというソフト」、即ちソフトのソフトということになる。答えは結局のところ次のようになる——その「仕組み」を変えろ、と。

学校のカリキュラムに頼らずに自分の自由時間に自分の英語学習をLL化して頑張っている学生の中には、昔の学生と比べてS⇔Sjのすばらしく発達した者がいる。そうである以上、LLは本来の長所を發揮できるような「仕組み」の中に存在させねばならない。当然、『お湯』がさめないうちに繰り返し火を与えるべく、週のコマ数をもっと多く、さらには一日のコマ数をもっと多くすべきである。『お湯』がさめかかったころになって火を送ってもダメだと言いたい。

S⇔SjにとってLLの効果がすばらしい以上、『お湯』の温度がどんどん上昇すべく、入学した次の日から毎日毎日、それも休憩時間をはさんで一日中やったらよいと思う。LLはLanguage LaboratoryではなくLearning Laboratoryだと呼ばせている学校もあるようだが、筆者に言わせれば、何と呼ぼうともっと連続して集中化を行わなければ、S⇔Sjという『フロ』はなかなか『沸かない』。もっとLLの時間を日単位と週単位の両方で多く(=long)しなければ、何をしてもダメだ。そうしない限り、大学の勉強だけチャントやれば確実に力がつく時代は来ないと言い切れる。逆に、入学後徹底的にLL(何もブースの中でヘッドフォンを付けてというイメージにこだわることはない。S⇔Sjの進歩にプラスになることなら、どのような形態のものでもよい。極端な場合、青空の下でのLLだって可能だ。この意味ではLaboratoryよりもLearningの方がよい。Language Learningが一番S⇔Sjの意味から言ってピッタリである。)でS⇔Sjを鍛えあげれば、Dすることなく英文が(従って英文学の作品も)次元の違ったスピードで、また(当然のことであるが)より正確に「読める」ようになるはずである。LLではダメだLLL(Long Language Learning)でなければ!具体的に言えば、入学後最低1セメスターは英語と言うlanguageの学習に集中するようにして、一般教育は可能な限り後まわしにしてもらうべきだ。一般教育の重要性を否定する訳ではないが、入学後のこのまとまった時間を英語のいわば「カンズメ」教育に使うか否かは、たとえば「英文学」を例にとれば、いつまでも作品をDの方法で、ということは、一冊の分厚い小説を読むとすれば一年も二年もかかるであろうスピードでしか読めないか否かの問題に通じるからである。従来のやり方では、小説を文学として楽しむというよりも、小説をいわゆる「英文和訳」の教材にしていると言った方が当たっているケースが多いのではなからうか。文学を味わうためには、どンドン読み進むことができるのが前提である。外国語である以上「コトバ」の学習はいつまでも必要であろうが、もし本当に文学をやりたいのなら、一日も早く「コト」と「ココロ」の世界へ没頭できるようにしなければならない。

そうならば、英文学科の学生の大部分が、本当は自分は文学にそれほど興味が無いことをはっきり認識するであろう。(第一あれほど多くの本を読まない連中が外国の文学に興味があろうはずがないと筆者は信じている。) そうなった時にはじめて、本当の「英文学」の研究と言っても大げさでないものが可能になるであろうし、「読」めも、「話」せもしない英語専攻生が毎年毎年世に送り出されるといふ現状が少しは改善されるのではなからうか。恐しく「文法」知識に欠け、恐しく単語を知らず、その上恐しく「やる気」に欠ける学生も現実に多数存在している。この種の連中には何をやってあげても意味があまりないであろう。しかしながら、他方で、時間さえかければ、(即ち $S \rightarrow S_j$ のプロセスはその訓練不足の故に未熟ではあるが、) 英米の読書階級が読むような書物をかなり正確に読みこなし、かつその内容についても知的興味を持つ学生も存在している。相当数の語彙と文法力をバックにした秀れた「D能力者」たちである。これらの若者は月単位の集中訓練でメキメキ力をつけることが可能である。この連中を、入学後のいわゆる「五月病」の患者にしてはならない。退屈な一般教育の講義から講義へと移動する毎日のあいだに無気力と失望を味わせてはならないのである。(一般教育の中には退屈な講義がないと断言できる大学は少ないのではないかと思うが、いかがなものでしょうか。) 入学後すぐに専門教育のための基礎教育の中にドブプリつけこみ、(中には悲鳴をあげて退学する者も出るかも知れないが、) 『さすが大学だ』とか、『苦しいけど、自分でも力がついていくのが体で感じられ、やりがいがある。』というような声も聞けるだろう。『歩ける』ようにしてあげれば、自ら『走れる』ようにはなるものだ。走りたいとその人間がおもえば。

註

- (1) 本稿は『別府大学紀要』第19号(1978年1月)に発表した『英学再事始—新たな時代へ向けて—(その1)「読む」と「解説」とについて』に続くものである。
- (2) Edwin O. Reischauer, *THE JAPANESE*, Tokyo, Tuttle, 1978
- (3) 渡部昇一, 『秘術としての文法』(大修館書店, 1977)
- (4) *Ibid.*, p. 11
- (5) *Ibid.*, p. 10
- (6) *Ibid.*, p. 8

- (7) Ibid., P. 9
- (8) 渡部昇一、『知的生活の方法』(講談社, 1977), P. 39
- (9) 以上の引用は、Ibid., pp. 40-47
- (10) *The English Journal* (アルク, 1979年1月1日発行), P. 69
- (11) グレゴリー・クラーク(村松増美訳)、『日本人—ユニークさの源泉—』(サイマル出版会, 1978)
- (12) 前掲誌, P. 69
- (13) 文芸春秋社刊『英語教育大論争』(1975)参照
- (14) 前掲、渡部昇一、『知的生活の方法』P. 39
- (15) 『宮崎大学教育学部紀要(人文科学)44』(1978) pp. 17-25